大会趣旨説明

2006 年 10 月 27 日

山下英次

ご紹介いただきました山下でございます。このシンポジウムを実現するまでにかなり長い時間がかかりまして、最初に私が駐日欧州委員会代表部にお邪魔しましたのがおととし（2004 年）の９月のことでした。そして、そのときの責任者の方などはもうみんなブリュッセルに戻られております。したがいまして、２年以上前になりましたけれども、終始積極的にサポートして下さいまして、非常に寛大な態度で接していただきましたことを深く感謝いたしております。

このシンポジウムは、アジアの地域統合について考えるということで、それをヨーロッパの経験に学ぶということです。ごく一般論としては、ヨーロッパはキリスト教の伝統があるので幸いしたが、アジアは多様なので難しいのではないかとよく言われます。専門家は、そういうことは余り言わないような気がしますけれども、一般の方はそのような印象を持っておられるようです。しかし、実は、ヨーロッパもかなり多様なのです。ヨーロッパも、これまで順調に統合を進めてきたわけではなく、非常に闘ってきた、あるいは非常に苦労してここまできたということだろうと思います。

アジアは、アジアなりにそれなりのアイデンティティが私はあると思います。いずれにせよ、我々アジアは、最終的には自分たち自身で統合の方法・方式を見付けなければならないのですが、しかし、最も進んだ統合モデルであるヨーロッパに学ぶ価値は、非常にあると私は考えています。

それを多面的にこのシンポジウムでは討論しようということです。本日は、金融面が中心で、明日の午前中は貿易ということで、最初の三つのセッションは経済面なのですが、それ以降は政治や文化という面も扱い、学際的に考えようということが、われわれのシンポジウム一つの特徴になっております。

それからスピーカーの方々も、学者が中心なのですが、政治家、官僚、あるいは中央銀行の方、それからジャーナリスト出身の方もおられますし、企業の方もおられるということで、非常に多様な、各界からスピーカーをお招きしているということが特徴になっております。

実を言いますと、いまアジアでは「ＡＳＥＡＮ＋３」といって、ＡＳＥＡＮ10 か国と日

本と中国と韓国の合計 13 カ国で基本的にアジアの地域統合をやろうということに一応なっているわけですが、残念ながら、日本はいまのところ国全体としてはあまり積極的ではないというより、むしろ、13 カ国の中ではいちばん積極的ではないのかもしれません。しかしそれではいけない、いろいろな面から考えていかなければいけないということで、この国際シンポジウムを企画いたしました。皆さん方におかれましても、今回のシンポジウムがこの問題を考える一つの機会になっていただければと念じております。

三日間の討論ですけれども、皆さんにとって有意義なものであることを願っております。どうもご清聴ありがとうございました。